

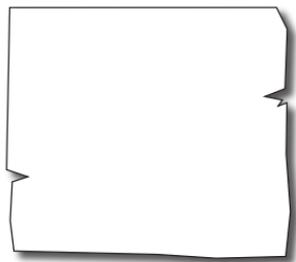
THE 7 FRAMES FOR All LIFE

7つのワクワク枠

ふたりのコンパス①

第4フレーム

『Out』



『In』

木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

僕は 飛び込んだ。

彼女^{るね}瑠音、おじいさん…と支え合う
思春期さんぽのフルーツフル青春物語

SAMPO FRUITS



ふたりのコンパス①

『In Out』

プロローグ

72

そこは、あの岬だった。

そこから見える海の中に、人の姿があった。

それは女の子——

高校で初めて同じクラスになった子——

それまで、ほとんど、あいさつ以外に言葉を交わしたことがなかった。

「おいでよお～！ 一緒に泳ごうよお～！」 彼女は立ち泳ぎしながら僕に向かって明るく言うと、海の中をスイスイと泳ぎ始めた。

水泳、得意なんだ。

そのときだ。

「痛いーい！」と彼女の叫ぶ声が聞こえた。

！！！！

波間で上下しながら苦しそうにしている様子が、明らかに見て取れた。——おぼれそうになっている！？

「ほら、助けに行かんか？」 いつの間にか、側にいるおじいさん。

「——大丈夫。おまえさんなら、できる」 そう言った。

「できるって—— 一度おぼれた身だぜ？」と僕。

「自分を信じる。おまえさんは、すぐれたライフセーバーじゃ。世界一のライフセーバーじゃ。彼女を余裕で助けることができる」 おじいさんは、そう言い切った。

「——」 . . .

結局、——僕は飛び込んだ。

ザブン！

海の中に——。

73

そのときの僕は、海の中を華麗なクロールで泳ぎ——

彼女のそばにスムーズにたどり着くと、彼女を優しく抱え——

「もう、大丈夫だよ」 そう言葉をかけて、安心させた。

「あ、ありがとう——」 彼女は感謝した。

そうして落ち着きをとりもどした彼女に、僕の両肩に、背中側からつかまってもらうと、僕は、そのまま岸へ向かって泳ぎ始めた。

その見事なライフセーバーの働きぶりで彼女を助けているという状況が、うれしいインパクトを僕に与えつつあった。

そのときだ。

「あ、あれは何？」 彼女が不安そうな声を発した。

立ち泳ぎを始めながら、その視線の先を探ると――

20m くらい先に、大きな背びれらしきものが水面上に突き出ているのがわかった。

「もしかして―― サメ？」 彼女の不安そうな声。

「――え？ イ、イルカとかじゃない？」と僕。

15m くらいに距離が縮んだ。

「こっちに近づいているね」と彼女。

「ああ」

「やっぱり、イルカなのかな？」

「――」 僕は背びれから遠ざかるべく、彼女につかまってもらいながら、急いで泳ぎ始めた。本能的に、そうすることに決めたのだ。

「ねえ、どうして逃げるの？」

「だって、サメかもしれないし――」

「え？ やっぱりサメなの！？」

彼女は僕に抱きついた。彼女のぬくもりが水着越しに背中に伝わる――。 !!!

僕は必死に泳いだ。岸に向かって――。

けれど、背びれは、僕らを上回るスピードでぐんぐん近づいた。

なぜか、映画『ジョーズ』のテーマ曲が流れている――。

10m、7m、5m、3m…

「ああ！ もうすぐそこまで来ているわ！」

つかまる彼女の腕にも力が入る――。

僕は、あせりながらも、彼女を救うべく、彼女の盾になるようにくると向きを変え、彼女と背びれの間にいった。

100cm、70cm、50cm、30cm…

「イヤァー！」&「うおおー！」 彼女と僕は、ほぼ同時に叫んだ。彼女は、これまで以上に強く僕に抱きついた。

「カ〜ット！」 突然、誰かの大きな声が響き渡った。

見回すと、周囲が学校のプールに変わっていた。

え！？ いつの間に――

僕は足をプールの底につけた。何が何だかよくわからない――。

「はい、なかなかよろしい！ いい感じだったよ」 その声の方を見ると、なんと映画監督の姿をしている岬のおじいさんがいた。

ええ！？

背びれの方を見ると―― そこには、犬かきをしているランプベリーの姿があった。背びれの形のおもちやのかぶりものを胴体に取りつけている――。

ランプベリー！ ……

ランプベリーはプールサイドに上がるとスタッフに背びれを取り外してもらい、それから、しっぽを振りながら、おじいさんのところへ駆け寄った。「よーし、よしよし、なかなかの名演技だったよ」

そう言いながら、おじいさんはランプベリーの体をタオルで拭いてあげている――。 オレたちではなく、ランプベリー！？

おおぜいひとが大勢の人がプールサイドにいることに、僕らは気づいた。

彼女は抱きしめていた腕をほどくと、プールの底に足をつけた。

見ると、恥ずかしそうに桃色の顔をうつむかせている——。

「よかったあ。無事で——」 彼女は心底ホッとしたように、心笑みながら言った。——かと思うと、彼女は気を失い、力の抜けた体を僕の方へ預けてきた。

「え？ 大丈夫？ 大丈夫？ 大丈夫？ …」

74

パッと目を開けた。

しばし呆然——。 …

おじいさんは昼寝していた場所にはいなかった。

立ち上がった僕は、辺りを見渡した。

すると——

「——おーい！ ここじゃあ〜！」

よく目を凝らすと、なんと、おじいさんは海の中にいたんだ。

！！！！

釣りのウキのように、おじいさんの顔が見え隠れしていた。

「若者よお〜！ ——気持ちがいいぞお〜！ ——よっ」

「それより、大丈夫かあ〜！？ 無理しないでくれよ〜！」

「よゆうじゃ。よゆう！ ——ほっ。快適じゃあ！ ——はっ」

決して、きれいな泳ぎとは言えなかったが、それなりに泳ぎを楽しんでいるように見えたんだ。

75

「やはり、泳ぎは、一度、体で覚えてしまうと忘れんもんじゃの？」
海から戻ってきたおじいさんは、そう言った—— 「ゲホッゲホッ。

ゲホホッ」——あとにむせた。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫、大丈夫——。じゃが、終盤へばっちまってよ——もうちょっとで、おぼれてしまいそうになるところだったわい。

アッハッハッ！ ゴホッ」

「——」！！！！

「わしゃあ、これでも——泳ぎの名手だったんじゃよ。若い頃から」 おじいさんは、そう言いながら腰を下ろした。

「年を考えてくれよ。年を。それは若かりし過去の話なんだから」
僕も腰を下ろした。「体力は、めつきり落ちていんだから。

——それに退院したばかりじゃん」

「グホッ。3本くらいとられた感じじゃの。アッハッハッ！」

「——」 …

——ふいに僕の目は、ある一点に釘づけになった。おじいさんが抱える衣類の中に紛れて、濡れた、あの地図があったんだ。

音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて。

——音楽フェード・アウト

76

ひろげて乾かされている地図のそばで、ふたりで座って、はらかな水平線を眺めていた。

空を舞っているカモメたち——。

ポ——ッ テッテッテッ… 遠くへ進んでいる船——。

「それにしても、地球ってさあ、でかいようで小さいよね？」と僕。

「ん？ なぜ、そう思うんじゃ？」

「だって—— ここで、こうして水平線を見ていると、“ああ、やっぱり地球って丸いんだなあ”って、そう感じるから。

——せいぜい、数十メートル程の高さから見てもだぞ？」

「おお、そうじゃのお」 おじいさんが、しみじみと応えた。

「——アハッ。実際に、フワフワ無重力の宇宙船の中から真ん丸い地球を眺めたら、感動ものだろうね？」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

「うむ。そうじゃな」 おじいさんは、そのまま、しばらくの間、遠くを眺めた。それから、おじいさんは、ふいに口を開いた。

「若者よ——」

「——うん？」

「宇宙人は、いると思うかい？」

「は？ ——え？ いきなり、どうしたの？ SFの世界ならまだしも。——え？ おいじいさんは、どう思っているの？」

「いるとも」 あっさり答えた。

「どうして—— わかるの？」

「少なくとも、わしが宇宙人じゃからのお」

「ええっ!？」 言われてみれば・・・

「もちろん、おまえさんも宇宙人じゃ」

「は？」

「地球は、宇宙の中にあり、宇宙の一部そのものじゃ。それはつまり、“地球人が宇宙人である”ということにほかならない」

「まあ、そりゃあ、そうかもしれないけれど——」・・・

「宇宙の中の地球が宇宙の一部そのものでもあるように、地球の中の地球人たちは、地球の一部そのものでもある。

その事実を見失い続けるならば、あっという間に地球人たちは絶滅してしまうじやろう」

音楽急停止 ♪ Soaring Up Into The Sky

「——」・・・

「宇宙的な長い時間で見れば、地球人たちの生存期間は、まだまだ、ほんの一瞬にすぎないじやろう。——どうなるんじやろうかのお。地球人たちは——」

「——」・・・ 「——うん。どうなるんだろうね」

77

船は、さらに遠ざかり、水平線の彼方に消えていた。

空を舞っているカモメたちは、逆に岬に近づいていた。

「鳥たちは—— 一生、海を泳ぐ魚の気持ち、わからないのじゃろうかのお？」とおじいさん。

「——まあ、ふつう、そうだろうね」と僕。

「うむ。それじゃあ、ペンギンたちは？」

「え？ ——ペンギンだったら、ある程度わかるだろうね」

「うむ。——では、魚たちは、一生、空を飛ぶ鳥の気持ちがわからないのじゃろうかのお？」

「ふつう、そうじゃない？ ——まあ、トビウオあたりなら、少しは、わかるだろうけど」

「うむ、そうじゃの」

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

おじいさんは、しばらく水平線の彼方を眺めていた。

かと思うと、口を開いた。

「若者よ——」

「ん？」

「“地球上で暮らしておる者”と“宇宙から地球を眺めておる者”、——果たして、どちらが、地球をよく見ておると言えるじゃろうかな？」

「——宇宙から地球を眺めている人？ だって、それで“地球が丸い”ってことが、より、はっきりわかるから」

「じゃが、地球上で暮らすことで初めてわかることも、いろいろあるじゃろ？」

・・・ 「——じゃあ、地球上で暮らしている人？」

「じゃが、遠くに離れなきゃわからないことも、あれこれある」

「じゃあ、どっちなの？」

「うむ。外へ離れて見ても、中に飛び込んで見ても、両方とも初めてわかることがあるってことじゃな。」

それは——

海や空も同じ。学校や社会も同じ。

そして、誰かのライフも同じじゃ」

「——え？」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 78へ続く

78

「おまえさん—— 今、好きな女の子は、おるじゃろうか？」 おじいさんは、ここぞというタイミングで僕に尋ねた。

「気になる子は、いるけど——」 素直に白状した。

「その子のこと、どう思う？」

「どう思うって——」

「じゃあ、女の子を、どう思う？」

「知らん。あいつら、それこそ異星人のような存在じゃないか？」

「じゃあ、気になる、その子のことは？」

・・・ 「——同じ？」

「若者よ」

「ん？」

「若者に、いろーんな者がおるように—— 年寄りにも、いろーん

な者ものがおる。男おとこに、いろーんなヤツがおるように—— 女性じょせいにも、いろーんな方かたがおる。

それは、いろーんな鳥とりがいたり、いろーんな魚さかながいたりすることと同じじゃ」

「——」

「もちろん、性別せいべつ、年代ねんだい、所属しよぞく…等とうの肩書きかたがを知しることを含ふくめて、遠とおくから眺ながめることで初はじめて見みえる何なにかも、きつと、あるじゃろう」

「——」

「じゃが、一方いっぽうでな—— 表情ひょうじょうを見みせ合あったり、言葉ことばを交かわわし合あったり、行こうどう動どうをともしたり… を含ふくめて、相あいて手てと直ちよくせつ接む向むき合あうことことで初はじめて見みえる何なにかも、たーくさん、あるんじゃ」

「——つまり、相あいて手てのラなかイとフこの中ちゆうに飛とび込こむことことで初はじめて見みえる何なにかも、いっぱい、あるんだね？」

「うむ。そういうことじゃな。さすが若わかもの者ものじゃ。

——では、そろそろ、次つぎのフだいレだいーム、第4フはなレなームについて話はなそうかの」 おじいさんは、そう言いいながら、ほとんかわど乾かわいている地図ちずを手に取とった。

それをゆつくりと裏返うらがえすと、口くちを開ひらいた。

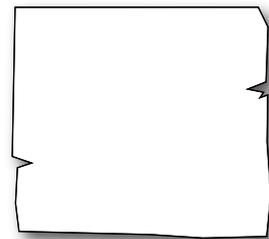
「——では、行いくぞ？」

「ああ、さあ来こい」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 78 へ続く

第4フレーム

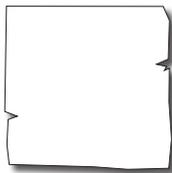
『Out』



『In』

79

『Out』



『In』

「『In Out』じゃ」 そう言いながら、おじいさんは、紙の下側と上側を順番に指さした。

「英語？」

「そうじゃとも。——インターナショナルじゃろ？」

「——。ああ、まあ——」・・・「じゃさあ、このフレームも、やっぱり、いろーんな“ライフのあり方”を教えてくださいの？」

「ああ、その通りじゃとも。——うむ。やっぱり、さすが若者じゃ」

「——」・・・

「では—— わしゃあ、これから昼寝再開といこう。

——ちと、海水飲んじまったからのお。アッハッハッ！」

おじいさんは、そう言って笑うと、ゆっくりと横になった。

「——おじいちゃん、あんまり無理しないでくれよ？」

「ん？」

「例えば、魚を食べるときは、十分に注意してくれよ？」

「——。そうじゃな。——ありがとう」 おじいさんは、しみじみと言うと、目を閉じた。——かと思うと、ふいに目と口を開いた。

「あつ、そうじゃ。岬の、このあたりはな—— その昔、わしが、好きになった女の子と生まれて初めてキスした場所でもあるんじゃ。そして、なんと、その子が、将来、わしのお嫁さんになってくれたんじゃ。

——まあ、とっても若かりしときの話じゃがの。アッハッハッ！」

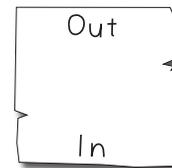
「——」・・・

音楽終了 ♪心地よき日々 Comfortable Days

80

家に帰った僕は、さっそく、それを書き込んだ。

「『In』と——『Out』と。——こんな感じ？」



さっそく、それを手に持った。

「キャハ！ こんにちはー♪」

「——」——ギョッ！？」

コンパスの針の絵が浮かび上がると同時に聞こえてきたのは、明らかに女性の声だったのだ。

「キャハハ！ ハジメマシテー♪」 その声は、明るくもあり、優しくもあり、みずみずしくもあり… そして、かわいくて——

「は、は、初めまして。こ、こんにちは」

——女！？」

キャハ！ そうでーす♪ 女の子でーす♪ キャハハ♡

思わず、ペーパー・コンパスを机の上に置いた。

——マジかよ！？」

81

それから、^きを取り直^とすために、一階^{いっかい}の台所^{だいどころ}でグラスに冷^{つめ}たい水^{みず}を注^{そそ}ぎ、二階^{にかい}の自分^{じぶん}の部屋^{へや}に持ち帰^もった。一口^{ひとくち}飲み、一息^{ひといき}ついた。

そうして、意^いを決^{けつ}して、——僕^{ぼく}は飛^とび込^こんだ。

ペーパー・コンパスの女^{おんな}の子^このライフの中^{なか}に——。

「き、君^{きみ}の名前^{なまえ}は、——な、何^{なん}でっしやる？」と僕^{ぼく}。

「キャハハ♪ 私^{わたし}の名前^{なまえ}は、コンパリーチェ♪

——あなた^{あなた}の名前^{なまえ}は？」

「ぼ、僕^{ぼく}は、な、なつみさき、さんぼ—— と申^{もう}します」

「ナナツミサキ・サン——」

「——」・・・

「ナナツミサキ・サンは、今^{いま}、何^{なに}をやっているの？」

「今^{いま}、——高^{こう}校^{こう}一^{いち}年^{ねん}生^{せい}をやっています」

「そう。ナナツミサキ・サンの将来^{しょうらい}は、どん^{かん}な感じ？」

「——ぼ、僕^{ぼく}は、将来^{しょうらい}、フレーム・マスターになり^なります感じ^{かんじ}です」

なんか、さっきから言^{こと}葉^はがヘン——

「キャハ♪ そうなのね。——どん^{なん}なフレーム・マスターになるの？」とコンパリーチェ。

「え？ どん^{なん}なつて——」・・・ 水^{みず}を一口^{ひとくち}ゴクリと飲^のみ込^こんだ。

「じゃあ、フレーム・マスターにな^なって、——それ^{それ}で、どうするの？」

「それで？ それで—— えっと、だから—— そのへんは、まだ、よくわかんないけど、——おじいちゃん^{おじいちゃん}の想^{おも}いを引^ひき継^つぐんだよ。

——そう！ フレーム・マスターの中^{なか}のフレーム・マスターの想^{おも}い——」

「そう」

「——」・・・ 「——それ^{それ}だけ？」 思^{おも}わず尋^{たず}ねる僕^{ぼく}。

「え？ “ソレダケ？”——つて？」

「ほかに、もつとない？ “えらいねえ”とか、^{りっぽ}立^た派^はだねえ”とか、“すばらしいねえ”とか……」

「プッ」

「——」・・・ 「——別^{べつ}に笑^{わら}わなくな^なったつていいじゃん」

「オナラ^でが出^でたのでーす♪」

「——」・・・

しばし、沈^{ちん}黙^{もく}が流^{なが}れた。

・・・ ——お、女^{おんな}の子^こだろ？

——女^{おんな}の子^こもオナラ^でをするのよ♪

・・・ そりゃそうかもしれ^しないけれど——

水^{みず}を一口^{ひとくち}、ゆっくりと飲^のみ込^こんだ。

「あれあれ？ もしかして、女^{おんな}の子^こはし^しないと思^{おも}っていたとか？」

「——。 ——。 ——つていうか、ふつう“オナラ^で出^でちゃったの”とかつて言^いい方^{かた}するだろ？ ——“恥^はじらい”つてやつ？」

「キャハハハイ♪」

「——」・・・ ——な、何^{なに}者^{もの}なんだ。この子^こ——

フレーム・フォー・オール・ライフから生^うまれた、コンパス・フォー・オール・ライフでーす♪

——コ、コンパスが、オナラ^でする？

何^{なん}てつたつて、別^{べつ}名^{めい}“コンパス・オブ・オール・ライフ”だからね♪

・・・ 「——だから？」 水^{みず}を一口^{ひとくち}。

「だから、コンパス・オブ・オール・ライフだから——

オナラもするし、恋こいもするし、結婚けっこんもするし、○○○○もするし、
○○○もするし… 子こどもも産うむんだよー♪」

「ブーッ！！！」 口くちの中なかの水みずが、全部ぜんぶ、吹ふき出でた。

82

コンパリーチェを机つくえの上に置おいた僕ぼくは、よろよろと一階いっかいの台所だいどころへと
向むかった。

——調子ちようしくるうよ。まったく——。

女おんなの子こだと思おもって、構かまえて損そんしたぜ。

——でも、ここで道草みちくさしているわけには、いかないんだ。

イン、アウト、イン、アウト！

うん。英語えいごでやったぞ。

in と out は、中なかと外そとって意味いみだ。

つまり——
グラスの中なか グラスの外そと
冷蔵庫れいぞうこの中なか 冷蔵庫れいぞうこの外そと
家いえの中なか 家いえの外そと

ってことでいいのだろうか？

・・・ ——だから何なに？ うーん——。 ・・・

その後ご、何なんとなく外がいしゅつ出しゅつしたくなつた僕ぼくは、チャリンポ——自じてんしゃ転せん車しゃ
で散歩さんぽすることにした。自じてんしゃ転せん車しゃに乗のると、気きままにペダルをこいだ。

音楽イン ♪夏 Summer

イン、アウト、イン、アウト、なかそと、なかそと…

ポストの中なか ポストの外そと
公園こうえんの中なか 公園こうえんの外そと
噴水ふんすいの中なか 噴水ふんすいの外そと
アスレチック遊具ゆうぐの中なか アスレチック遊具ゆうぐの外そと
森もりの中なか 森もりの外そと
枝えだや葉はの中なか 枝えだや葉はの外そと
鳥とりの巣すの中なか 鳥とりの巣すの外そと
水筒すいとうの中なか 水筒すいとうの外そと
口くちの中なか 口くちの外そと
お腹なかの中なか お腹なかの外そと

公園こうえんに到着とうちやくしてから自じてんしゃ転せん車しゃを置おいてしばらく歩あるいた僕ぼくは、木陰こかげ
ベンチに腰こしを下おろすと、家いえから持もってきた水筒すいとうの中なかの水みずを少すこしず
つ飲のみ始はじめめた。

音楽 ♪夏 Summer 83 に続く

83

公園こうえんの、やや離はなれた芝生しばふの上うえを、小ちいさな子こがバランスを取とりな
がら、よちよち歩あるいているのに気きづいた。

かわいいや。歩あるき始はじめめて、間まもないのだろうか？

そのときだ。その子こが何なにかにつまずいて転ころんだ。

あっ！

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

「ウーン！」その子は、声をあげて泣いた。近くのベンチに座っていたお母さんが笑みを浮かべながら小走りに近づいていくと——子どもを抱きかかえて優しくリズムを取りながら、「痛かったねえ。よしよし、よしよし… 痛い痛い飛んでいけえ〜♪」と声をかけながら、痛みがどこかへ飛んでいくような仕草を何度か繰り返してあげた。

それでも、その子は、しばらく泣き声をあげるのを止めなかった。——かと思っていると、何が起こったのか、一瞬で泣き声から笑い声に切り替わった。

——えっ!? 何があったの?

少し驚いた僕は、しばらく、ぼんやり思いめぐらせた。

そして——

・・・ ——あっ! ひらめいた!?

人を見るとき——

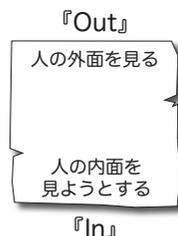
その人の“外見、ルックス、容姿、服装、顔の表情、行動、言動、姿勢、姿形、体形…”を見る人生もあれば、

その人の“中身、気持ち、思い、考え、思考、感覚、感情、心情、心…”を見ようとする人生もある。

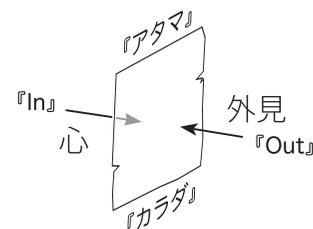
つまり——

人の外面を見る人生が『Out』の方向にあるとすれば、人の内面を見ようとする人生が『In』の方向にある。

例えば、そんなブチ・マップも作れるだろう。



うん。そうすると、心とは、“頭と体の両方において内側からキャッチしている対象”なのだろう。



口に含んだ水を、ゆっくり飲み込んだ。

84

ふと、コンパリーチェのことを考えた。

あのキャラ——

確かに苦手だけれど、まだアップグレードしていないから、今は奇妙で、おかしなことを話しているのかもしれない。

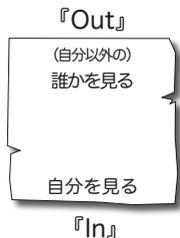
——うん。ゆっくり長い目で見ようかあ。

遠くに離れている分、相手ことを冷静に見つめられる気がした。

そのときだ。

——あ! また、ひらめいた!?

例えば、自分を見る人生が『In』の方向にあるとすれば、自分以外の誰かを見る人生が『Out』の方向にあるんじゃないか?



そんな調子で——

新しいプチ・マップの作り方が、次々と見つかった。

『In』

自分を見る
 自分を信じる
 自分を好きになる
 自分のために
 自分らしく
 これは自分の言葉だ
 これは自分の考えだ
 自分の気持ちを見つめる
 自分が、どう感ずるかを見つめる
 自分が、どう思うかを見つめる
 自分が、やりたいから
 自分からすすんで
 自ら(自由)に
 自分で見る
 自分で決める
 自分でやる

誰かを見る
 誰かを信じる
 誰かを好きになる
 誰かのために
 誰からしく
 これは誰かの言葉だ
 これは誰かの考えだ
 誰かの気持ちを見つめる
 誰かが、どう感ずるかを見つめる
 誰かが、どう思うかを見つめる
 誰かが、やってほしがるから
 誰かにすすめられて
 誰かから言われて(他由に?)
 誰かに見てもらう
 誰かに決めてもらう
 誰かにやってもらう

『Out』

...

85

家から高校まで行くには、自転車で30分くらいかった。

行きの所要時間は、帰りより長かった。

家から高校へ向かう途中に長い上り坂があったからだ。

その坂は、家から高校へ向かうときには、心臓破りの坂として立

ちはだかり——高校から家に帰るときには、ジェットコースター

坂として背中を押してくれた。

高校へ向かう途中の長い上り坂では、僕は、いつも、腰を浮かせ

てペダルをこいだ。

その長い上り坂のどこかには、たいてい、自転車を引いて歩く、ある女子生徒の姿があった。

——それは夢にも出てきた彼女だった。

後ろ姿だけでわかった。

ドキドキドキ… 高鳴る鼓動——。

彼女の存在を内心とても意識していても、いつも、彼女の横を通り過ぎながら、軽くあいさつするだけだった。

静かな緊張の瞬間——

その何倍にも感じられた濃密な時間が流れる間、英単語の暗記は、完全に中断していた。

86

僕は、自転車通学の間に英単語を暗記することにしていた。

たとえ1日3個ずつであっても、毎日積み重ねれば、相当な数に達するだろうと見通していた。

それは“将来、大学に進学する”という漠然とした目標を達成するための取り組みの一環だった。

そもそも、なぜ大学に行こうと思いだめたのか？

——ほかのみんなも大学を目指していたから？

——とりわけ、彼女も大学を目指していたから？

いずれにせよ——

厳密に言えば、当時の僕は、勉強していたのではなかった。

——勉強させられていた。

当時の自分が体験していた高校生活とは、“将来の夢や目標を明確にしながらかつて育む機会”からは程遠く、基本的に“目の前のノルマ、目先の課題をこなす日々”だった。

それが、実際に高校に入って初めてわかった現実だった。

——あれ？

何のために高校に入ったんだっけ？

87

教室での休み時間——彼女は、よく読書をしていた。

僕の席から遠く離れた彼女の席で——

まっすぐな、まなざし——

愛らしい横顔——

彼女は積極的にグループを作るタイプではなかったけれど——

初果陽 瑠音という名前から“ひるねちゃん”の愛称で呼ばれていて、クラスのみんなに好かれていた。

ときに、話しかけられるひるねちゃん——

はにかみがちな優しいしぐさ——

ときおりこぼれる笑顔——

に、ハッとする自分がいた。

一方、僕の席のひとつ前の席では、高校で初めて知り合っできた親友 井東 心笑君が、いろいろな科学雑誌をよく読んでいた。

数学や物理の成績が抜群で、ときに難解な数式だらけの本も読んでいた彼は、物理の授業中に先生に最初にそう呼ばれたことがきっかけとなって、“ニュートン君”の愛称で呼ばれていて、クラスのみんなから一目置かれていた。

その名前に似合わず、めったに笑顔を見せない、まじめ君だった。

読み終えた科学雑誌を、僕に、よく読ませてくれた。

僕も自然科学に関心があったので、意気投合した。

僕が自然科学全般に関心があった一方で、彼は、特に物理学に関心があった。

88

高校生活では、それなりに勉強に取り組んでいたけれど——
それなりに気分転換にも時間を割いていた。

定期試験が終了して開放感あふれる、夏休みが待ち遠しい時期の
ある日、おじさんが春に入学祝としてプレゼントしてくれた使い古
しの一眼レフカメラの存在をふと思い出した僕は、
写真撮影を趣味にしてみよう。——そう決めた。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

チャリンポする先々で、気に入った被写体を見つけては、カシャ
リカシャリとシャッターを切った。

朝顔のつぼみのみずみずしさ——

水平線の近くに浮かぶ、白い雲々と、そのあわい影——

木もれ日のまっすぐなライン——

樹木の周辺を駆け回るリスの一休み——

川面に夕陽の光が反射してできるキラキラ——

...

カメラは古くて、ズーム機能もオートフォーカス機能もなかった
けれど、風景写真から接写写真まで、好きなように思うままに撮る
ことができた。

この趣味の気分転換おかげで、勉強がはかどったのみならず——
“『In Out』のプチ・マップ作り”がはかどりはじめた。

音楽 ♪ Soaring Up Into The Sky 89 に続く

89

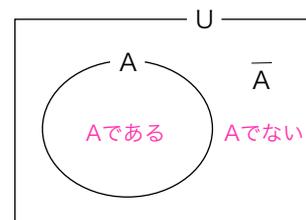
その日は、格別だった。

1校時は数学。

“集合”がテーマだった。

そのとき、“ド・モルガンの定理”よりも何よりも心惹かれたのは、
であるが『In』の方向、でないが『Out』の方向にあるという気づ
きだった。

図が、それを明確に示していた。



ふーん。・・・

2校時は総合社会——歴史 & 地理。

歴史は“時代の流れ”について。

原始時代、古代、中世の時代、近世の時代、近代、現代。

——そして、未来の時代。

そのとき、“未来の時代”という発想よりも何よりも心惹かれ
たのは、ある時代の中だが『In』の方向、ある時代から外れてが
『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

地理は世界の気候について。

熱帯雨林気候、サバンナ気候、砂漠気候、地中海性気候、温暖湿潤気候、ツンドラ気候…

そのとき、“気候”が時代とともに変動するという発想よりも何よりも心惹かれたのは、ある気候に属するが『In』の方向、ある気候に属さないが『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

3校時は生物。

その日は、タマネギから採取した薄い皮を顕微鏡で観察してスケッチを描く実習だった。

そのとき、“おお、生きているぜ！”という印象をもたらした“原形質流動”よりも何よりも心惹かれたのは、細胞の中が『In』の方向、細胞の外が『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

ノリにノっていた。

4校時の体育の水泳へ向けて教室で準備する間も『In Out』のプチ・マップ作りに熱中し続けた。

プールの中が『In』の方向なら、プールの外が『Out』の方向か。

プールに入るが『In』の方向なら、プールに入らないが『Out』の方向——。うーむ。・・・

——そう言えば、“out”と“not”って、どことなく似ているなあ。

あっ、ouとnoの部分は、互いに180度回転し合っているし——。

水着を持って更衣室に向かっていている間も『In Out』のプチ・マップ作りに没頭し続けた。

教室の中が『In』の方向なら、

教室の外が『Out』の方向——

いい天気であるが『In』の方向なら、

いい天気でないが『Out』の方向——

暑いが『In』の方向なら、

暑くないが『Out』の方向——

トイレの中が『In』の方向なら、

トイレの外が『Out』の方向——

ポケットの中が『In』の方向なら、

ポケットの外が『Out』の方向——

体育館の中が『In』の方向なら、

体育館の外が『Out』の方向——

時間に間に合うが『In』の方向なら、

時間に間に合わないが『Out』の方向——

更衣室の中が『In』の方向なら、

更衣室の外が『Out』の方向——

下駄箱の中が『In』の方向なら、

下駄箱の外が『Out』の方向——

「キャー!!!」「見て見て」「えー、信じらんない!」…

いきなり、周囲が騒然とし始めた。

音楽 急停止 ♪ Soaring Up Into The Sky

「——」 え!?

我に返って見上げると、そこには——

表現できない美しさの——

！！！！

そのとき初めて自分が女子更衣室の中にいることに気づいた。

——なぜ！？ ……

気が遠くの中で、誰かの声が聞こえたような気がした。

「大丈夫？ 大丈夫？ 大丈夫？ …」

こうして、——僕は飛び込んだ。

レモンのように酸っぱい未知のゾーンに——。

90

気づいたら、保健室のベッドの上で横になっていた。

何があったんだっけ？

——4校時は体育の水泳だったはずだ。

教室から移動して——

気づいたら女子更衣室に入っていて——

あのとき、あそこで、僕が見たのは—— ……

——！！！！

あのあと、どうなったのだろうか？

あのあと、いったい何が起きたのだろうか？

…

——そうだ！ そもそも、夢だったんじゃないか？

うん、夢であれば問題ない。夢ならば、全くノープロブレムだ。

どうか夢でありますように——

…

91

上半身をゆっくり起こした僕は、意を決して、保健室にいた保健の先生に話しかけた。おずおずと——。

「あ、あの、先生——」

「あら、大丈夫？」

「あ、はい。——あ、あの、いったい何があったのでしょうか？」

——それに、変な夢を見たようです」

「あら、よく覚えていないのね」

「——」 ……

「——あなたは、女子更衣室で気を失って倒れちゃったのよ」

「——」 …… 現実？ ……

「心ある有志が急いで私たちに知らせてくれて、それから担架を使ってあなたをここまで運んだのよ」

「——。——。す、すみませんでした。あ、あの、あのとき、僕は、イン、インア…」

「いんや？」

「あ、イエ、あの、^{かんが}考えごとをしていて——^き気づいたら——…」

保健の先生は、^{やさ}優しく心笑んだ。「大丈夫よ。それより、^{やす}ゆっく
り休みなさい」

「はい」^{いさよ}潔く横になった。

——ズドドーン！！

とてつもなく大きな何かが崩れ落ちるような感覚に襲われた。

音楽イン ♪冬 Winter

こうして、わがプチ・マップ作りは、わが“恋のきざし”のとき
めきを失恋の痛みへと一変させたのだ。

そりゃないぜ。

こんなに恥ずかしい事件は、彼女にも、間違いなく知られてし
まったはずだ。

最低最悪だ。わが青春は、おしまいだ。

——いや、それだけじゃない。

ウワサは、たちまちクラス中に、いや学校中に広がり、みんなは、
そういう目で僕を見るだろう。

ああ、人生、もうおしまいだ！

音楽 ♪冬 Winter 92 に続く

92

夏休みが、どんなに待ち遠しかっただろう。

何度、自分が消えてしまいたいと思っただろう。

まじめなニュートン君は、それでも、それとなく励まそうとして
くれたけれど、こちらは、何となく、きちんと接することができな
くなってしまった。ゴメンよ。こんな情けない僕で——。

その後、その悲しい現実から目を背けるかのようにして、勉強に燃
えた。

これしか自分にはないんだ。自分で自分にそう言い聞かせた。

でも——目標もあいまいで結果も伴わない勉強が、次第にばか
らしいこと、くだらないことに思えてきて、気分転換であったはず
のカメラの世界にのめり込んだ。

夏休みには、これまで見たことも聞いたこともないスポットを探
し当てるべく、地図とコンパスを頼りに自然の中へと飛び込んだ。

高原に咲く名も知らない花々の、鮮やかなレモン色——

小枝をしならす木の実たちの、みずみずしいストロベリー色——

静かな水辺に憩う水鳥の、透き通った白色——

川辺にたたずむイトトンボの、宝石のような青緑色——

豊かな枝のうねりを持つ巨木の、勇ましい茶褐色——

…

——こんなところに、こんなスポットがあったのか！

発見や感動の連続だった。

きっかけはどうかであれ、この“地図とコンパスを頼りに自然の中
に飛び込んだ経験”は、『In Out』のプチ・マップ作りを深めるた
めの、よいヒントになった。

音楽フェード・アウト♪冬 Winter

93

「地図を広げて初めて見ることがある。
一方、地図が描く場所に実際に飛び込んで初め

て見えることもある。これは、地図を広げて見る人生が『Out』の方向にあるとすれば、その場所に行って見る人生が『In』の方向にあることに対応しているのさ！」

「キャハハハイ♪」

「似たような例は、ほかにもいろ

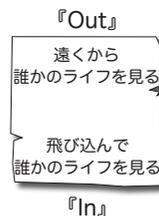
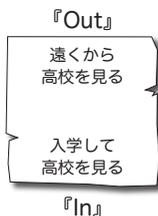
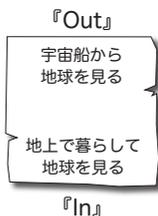
いろあるよ。例えば、“1枚の葉っぱを見る人生か、1本の木を

見る人生か、1つの森を見る人生か”もそうだし——“個人を見る人生か、社会を見る人生か”もそうだよ。

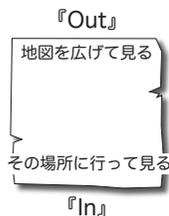
つまり——これらの例は、“ズーム・インして見る人生か、ズーム・アウトして見る人生か”という共通の意味を持っているのさ！」

「キャハハハイ♪」

「だから、地球、高校、誰かのライフ…との向き合い方も、本質的に、ズーム・イン、ズーム・アウトの例と見なせるんだよ」



「キャハハハイハイハイ♪」



94

「もちろん、ズーム・イン、ズーム・アウトの例は、ほかにもたくさんあるよ。

近くで、そばで見る
はっきりとした明確な目標
今、ここで、この人と…
特殊な話、例え話
具体的な言葉にする
（『ランベリー』『初果陽瑠音』『井塚心笑』…）

『In』

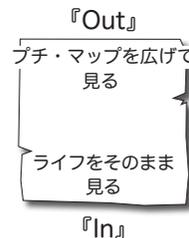
詳細を見る
詳しく、細かく見る (finely)
顕微鏡で見る、ミクロの世界を見る
拡大して見る (400倍…)
のめり込んで見る
地球を見る
ローカルに見る
自分(僕、私、彼、彼女…)を見る
短期的に見る、短い目で見ると先のことを見る…
（秒・分単位で、時間単位で、日単位で…見る）

遠く離れて見る
漠然としたあいまいな目標
いつか、どこかで、誰かと…
一般的な話
（女の子は… 男は… 一般的に…）
抽象的な言葉にする
（『犬』『動物』『生き物』『人間』『恋人』『親友』…）

『Out』

アウトラインを見る
おおざっぱに見る (about)
肉眼で見る、マクロの世界を見る
縮小して見る (1万分の1…)
ひいて見る
太陽系を見る (銀河系を見る)
グローバルに見る
自分たち(僕たち、私たち、みんな…)を見る
長期的に見る、長い目で見ると先のも見すえる…
（月単位で、年単位で、万年単位で…見る）

しかも、“プチ・マップを広げて見る人生か、ライフをそのまま見る人生か”自体も、同じような“ライフのあり方”の一例だったのさ
「キャハハハイ♪」



95

コスモスの花々が満開になる頃、ついに夏休みが明けた。
それから間もない初秋の季節に、意外な事実を知った。

音楽イン ♪秋 Autumn

「女子更衣室で、君がたおれたとき、真っ先に先生に知らせてくれたのは、瑠音さんだったんだよ。水着姿のまま校舎内を走って」

「——」 ええっ？！

その“心ある有志”が、ほかならぬ瑠音さんであったことを教えてくれたのは、ニュートン君——心笑君だった。

「もしかしたら、もっと早く伝えるべきだったのかもしれないね。遅れてゴメンよ」

「ううん、とんでもないよ」

どうして、彼女が——・・・保健委員とかだったっけ？

一瞬——水着のまま廊下を小走りして保健室へと向かってきている彼女の姿が、心に浮かんだ。

思わず首を振りながら、急いで意識から閉め出そうとした。

イカン、イカン！

——意外だった。

そういえば、夏休みに入る前も、あの毎朝の長い上り坂で、彼女は、あいさつをかわし続けてくれていたっけ——。

あの悲劇後に、こちらからのあいさつをためらっていたら、彼女の方からあいさつしてくれていたのだった。

ありがたかった。とても。

音楽 ♪秋 Autumn 96 に続く

96

それでも、悲劇のせいもあって勉強がはかどらないままに写真撮影にのめり込むことは、続いた。

日光に透ける紅葉の、赤や黄のハーモニー——

木の葉の合間から顔をのぞかせている、どんぐりの輝き——

初雪がもたらした、早朝の白銀の景色——

新雪を構成する、さまざまな形の雪の結晶——

クリスマスのイルミネーションの、幻想的な輝き——

…

と季節はめぐり——

さらに雪解けの頃のコンパリーチェとの一時的な別れを経て

山のくぼみにそってたたずむ残雪を染め上げる陽光のオレンジ——

土手に咲く小空花の、可憐なブルー——

春の光に透ける桜の花びらの、ういういしいピンク——

…

と季節はすすみ——

高校の新2年生へ向けてのクラス替えが発表となった。

僕は、瑠音さんとは一緒のクラスとなったけれど、心笑君とは

別々のクラスになってしまった。

心笑君は、そのクラス発表の日に、『北の国から'87初恋』の再放送を録画したビデオテープをゆずってくれた。

「この間、『北の国から'89帰郷』で熱烈なファンになったって聞いていたから、準備していたんだ。クラスが別々になってしまったか

ら、なんだか餞別みたいになってしまったけれど——」と心笑君。

「本当に、いいのかい？」と僕。

「いいのさ。その方が、この録画ビデオも、きっと喜ぶよ」

「——それでは、ありがたく、ちょうだいするよ。うれしいなあ♪」

「クラスは別々になってしまったけれど、これから、よろしく」

「ああ、こちらこそ、よろしく」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

97

高校2年の初夏。

おじいさんに会うために岬へと出発した。

カメラを持って——

音楽イン♪夏 Summer

花々やモンシロチョウたちを含む下り勾配全体を—— カシャ！

——これがズーム・アウト。

近づいて、おじいさんの笑顔を—— カシャ！

——これがズーム・イン。

「アッハッハッ！ なんだか照れるのお。カメラは——」

それから僕は、あの恥ずかしい悲劇のことも含めて、おじいさんにあれこれ話して聞かせた。

「アハーツ、アハーツ、アッハッハッハッハッ！！ ——傑作じゃ！

アッハッハッハッ！！」 その“悲劇”を聞いたおじいさんは、涙をこぼしながら腹を抱えて笑った。

——こんなに笑うおじいさんを初めて見た。

「ある意味、ラッキーじゃったの？」

「ったく—— ふざけないでくれよ。

笑いごとじゃなくて致命傷だよ。イメージ最悪だし——」

「ん？ すまん、すまん。

じゃが、若者よ—— そういうもんじゃ。人生はカッコいいことばかりじゃない。そういう、どうしようもなくカッコ悪いこともありつつ人生は成り立つとる。

——心配いらん。

笑い飛ばせる 때가、いつかきつと来るはずじゃ」

「——」 . . .

「わしなんか、もう、カッコ悪くて恥ずかしいことだらけじゃ。

それでも、これまで生きた。それでも、今、生きておる。

それでも、これからも生きるじゃろう。

人生は、いとおしいもんじゃて」

「——」

しばらく遠くを眺めていたおじいさんが、ポツリと口を開いた。

「彼女のこと、今も好きじゃろうか？」

. . . 「——ああ」

「うむ、そうか。

では、さっそく第5フレームを紹介しよう。きっと役立つはずじゃ」

「そうは言っても—— どうあがいても、かなわぬ恋だよ」

「まあ、その恋がかなうかどうかは、“ふたりの相性”の問題があるから、わしもようわからん。

じゃがのお—— これだけは、はっきり言える。

大きな大きな“人生の財産”をもたらししてくれるじゃろう。きつと」

「大きな大きな“人生の財産”——」

「そうじゃとも」

・・・ 「よくわからないけど——」 とりあえず、おじいさんに地図を手渡した。

「——うむ。では、行くぞ？」

「ああ、来い来い」

音楽♪ 夏 Summer 終了

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

ふたりのコンパス①

第4 フレーム

『In Out』

【完】